



## 久留米藩・朝妻焼窯に 職人を派遣？ それとも…

このほど、旧知の久留米大学教授より「大学の裏手で発掘調査が行われていた」との情報をいただきました。調査はすでに今年の3月末日で終了したようですが、久留米藩御用窯であった朝妻焼の窯跡が確認されたとのこと。

この朝妻焼は正徳4年(1714)、久留米藩第六代藩主有馬則維(ありまのりふさ)が財政再建のため藩政改革を行っている中で、久留米・御井町に窯を築かせたものだそうです。久留米市教育委員会に伺ったところ、『久留米市史 第十三巻 資料編』に詳細が記されているとのこと、それによれば、久留米藩の御用窯とされるが藩の公式文書は残っていないこと、久留米藩の御用商人石原為平の記した『石原家記』や坂東寺焼の窯元で久留米藩の土器司をつとめた田中家の記録『田中家資料』などにこの窯のことが記されているそうです。

そこには藩主有馬則維の命により肥前・有田から2名、伊万里から1名の陶工、さらに伊万里から絵書きの半蔵が来て、天草陶石を取り寄せて始められたとあります。

ところで、私どもが拠り所とする『有田皿山代官旧記覚書』は延享～天保にかけての約80年間にあった有田皿山に関する出来事を中心に記録されていますが、その前後の皿山の様子を記したものがほとんどなく、特に延享以前の有田皿山や職人に関して、その実態はよくわかりません。

今回、朝妻焼の窯場に有田から職人がどういう形で赴いたかですが、『代官旧記覚書』の明和2年(1765)の記事には、上幸平山の絵書き秀右衛門が三根郡白壁(現在の佐賀県みやき町)に行き、閉戸という罰を受けています。

また、安永4年(1775)に同じく上幸平山の細工



朝妻焼の染付草花文皿 九州陶磁文化館所蔵  
口径15.3cm 高さ3.7cm 底径8.0cm  
高台内に「朝」の染付銘がある

人覚太夫他6名が、武雄領の弓野山に行って仕事をしたことでお呵(しかり)を受けています。

他にも、同5年(1776)には上幸平山の細工人万太郎、同絵書き彦兵衛が鹿島藩の壱岐峠に焼物場再興のため、願いによって彼地に赴いていますが、そこで彼らによる作業までは可としながらも製作の指南は堅く禁じられています。

また、文政4年(1821)の達帳では「御国産重之場所柄」であるので窯焼きは所属する絵書き・細工人の名前を毎年、正月15日までに会所へ届けることが義務付けられ、さらには職人札を持って職人本人と窯焼きと一緒に人別改めをされました。

勿論、これに違反する窯焼きは名代札を取り上げられ、罰金を科せられるという厳しい管理が行われていました。

結局、朝妻焼は享保10年(1725)、或いは同13年(1728)ごろに廃絶したといわれていますが、それに至った経緯もよくわからないとのこと。前述の『久留米市史』には「肥前磁器と競合して窯を維持していくにはかなり難しかったことは確か」と記しています。

いずれにしても、前述のように技の伝播に関しては非常に神経を尖らせていた佐賀藩でしたので、果たして他藩の財政改革のために職人を派遣したのかどうか、気になるところですが、会津や瀬戸などには有田にやって来て技を習得した後帰郷し、その地で製陶業に携わったと言い伝えられていますが、残念ながら有田ではその記録を見ることはできません。

(尾崎葉子)

# 皿山

季刊

No.106

# 夏

2015

有田町歴史民俗資料館・館報

# 有田焼創業 400 年事業 (佐賀県プラン) に伴う 山辺田遺跡の発掘調査

## 発掘調査に至る経緯

来年は、有田焼創業の起点となる 1616 年から数えて、ちょうど 400 年の節目の年を迎えます。それに伴い、現在佐賀県や有田町などによってさまざまな記念事業が計画されていますが、その一つに「大発掘プロジェクト」と題された、佐賀県のプランによる山辺田遺跡の発掘調査があります。これは、「有田焼の歴史的・学術的価値の再検証」を通じて、創業以来受け継がれてきた伝統技術の継承及び磨き上げに資することを主な目的としています。ただし、実際の事業自体は有田町教育委員会が主体となり、県費補助の形で、平成 26 年度から 3 か年計画で実施することになっています。初年度の平成 26 年度の事業としては、今年の 1 月 20 日～3 月 13 日の間に、現地の山辺田遺跡で発掘調査を実施しました。



発掘調査の様子

## 山辺田遺跡の概要

山辺田遺跡は、平成 10 年に国指定史跡の山辺田窯跡の南側に隣接する水田を発掘調査した際に、はじめて発見されました。家屋の柱穴などが多く残ることから集落跡と考えられますが、出土遺物のほとんどが 1600～50 年代に操業した山辺田窯跡の焼成品であることや、同窯跡の色絵素地上に上絵付けを施した陶片なども出土することから、山辺田窯跡に関わった人々が製陶に従事した工房跡群と推測できました。ちなみに有田では、一連の製陶工程を担った登り窯跡と工房跡が一括して発見されたのは、これが唯一の例です。

登り窯跡である山辺田窯跡は、1640～50 年代にはいわゆる“古九谷”と称される最初期の色絵磁器を生産した代表的な窯場としてよく知られています。しかし、実際には赤、黄、緑などをはじめとする多彩な

調査地点の近景(上空より)



絵具で施文する上絵付けの工程は工房内で行われ、同じく工房内の“赤絵窯”と称される小型の窯で焼成されて完成します。そのため、以前から発掘調査が進んでいた山辺田窯跡では、上絵付け前の色絵素地は多量に出土するものの、実際上絵付けされた色絵磁器片はほとんど出土していなかったのです。



赤絵窯の内窯の口縁部片  
(上：外面 下：内面)

しかし山辺田遺跡では、平成 10 年の調査までの時点で、すでに 100 点ほどの色絵磁器片が出土・採集されており、また、その後平成 25 年に実施した調査では、色絵磁器の数は細片まで含めると 600 点ほどにも及びました。さらに、今回の調査では赤絵窯の構築部材である内窯の破片も多く出土したことから、やはり、上絵付け工程を含む山辺田窯跡に関わる工房跡と考えて間違いのないようです。



景德鎮製の祥瑞碗  
(上：外面 下：内面)

さらに、意外な出土製品として、今回は中国・景德鎮製の“祥瑞(しょんずい)”と称される上質な染付磁器碗が出土しました。また、平成 25 年の調査でも、“志野(しの)”と呼ばれる 17 世紀初頭の高級陶器皿が出土しており、そうした先進地の製品を実際に入手して、手本とするのもあったことが窺えます。

## 山辺田遺跡の発掘調査の意義

有田の磁器は 1610 年代に成立しますが、その後 1640 年代に中国・景德鎮系の技術を導入することに

よって、直接今日に継承される技術や製品のスタイルの基盤が確立しました。また、同時に朝鮮半島の李朝の生産技術をベースとするため当初は欠落していた色絵の技法も加えられたことにより、技術的にはようやく当時最高峰であった景德鎮と肩を並べる要件が整ったのです。そして1650年代までに、この新技術が有田の多くの窯場に普及したことを契機として、国内に止まらず世界の市場へと進出することに成功したのです。つまり、有田の伝統技術を再確認する上では、1640～50年代の窯業の実態を解明することは極めて重要なことなのです。

今年の1月からの調査では、工房跡群の所在する範囲も大まかには判明しましたが、そこには当時多くの工房があったものと推測されます。たとえば、あくまでも仮定の話に過ぎませんが、山辺田窯跡の登り窯は一時期に2基程度は同時に操業しており、焼成室の数を仮に1基を15室とすると2基で30室になります。登り窯は焼成室ごとに所有者が異なり、一つの業者で1から数室の保有が通例なので、山辺田遺跡には最大30前後の業者の工房が所在したことが推測されます。そして、それぞれの業者で10人が働いたとすると300人、その家族なども含めると、意外に大きな集落だったのかもしれない。

山辺田遺跡の発掘調査は、引き続き今年度も実施する予定です。実際に掘ってみないと分からないのが発掘調査なので、次にどんな発見があるのかは皆目見当が付きません。しかし、示してきた状況から工房跡であることは間違いないとしても、今後、遺構としての赤絵窯跡や各製造工程に関わる施設跡などが発見されれば、より具体的な工房の姿が見えてくるものと思われます。

(村上伸之)



遺物の出土状況



## テーマ展のご案内

今年、2015年は第二次世界大戦が終戦となって70年になります。すでに戦争を体験したことのない、戦争を知らない日本人は、人口の約8割を占めるようになったと言われていいます。

しかし、戦争が当たり前の時代に、有田に生きていた一般の人々はどのような生活をしていたのでしょうか。また、町民にとっての戦争とはどのようなものだったのでしょうか。

大正から昭和にかけて有田で活躍したあるお産婆さんが残した日記や役場日誌などは、当時の生活を詳細に伝えてくれます。また有田焼業界がどのような形で戦争に関わっていたかを、当館が所蔵している資料などをもとに紹介したいと思います。

### ・テーマ展

「戦争と有田（仮）」

### ・会 期

平成27年8月1日（土）～8月31日（月）

### ・展示資料

（文書資料）有田町役場日誌、有田村役場日誌、  
軍隊手帳など

（製品等）統制陶器、陶貨、手榴弾、磁器製コンロ  
陶製水筒、造幣局看板、陶製ボタンなど



造幣局看板



手榴弾



磁器製コンロ（香蘭社製）



陶製ボタン

## 古文書教室研修旅行に 行ってきました！

好天に恵まれた平成 27 年 4 月 22 日（水）、有田町公民館と共催で行っている古文書教室（初級・中級）の受講生による研修旅行を行いました。今回の目的地は、平戸オランダ商館（平戸市）と、鷹島歴史民俗資料館（松浦市）です。平戸オランダ商館では、担当の久家学芸員に資料やオランダ商館の成り立ちや館内の製品等を解説して頂きました。次に鷹島歴史民俗資料館と、隣接する出土文化財管理センターに向かいました。こちらでは、近年元寇の時の船が発見されたことにより、日本で始めて国指定の海底遺跡に指定された、鷹島神崎遺跡の出土品等が保管・研究されています。鷹島の歴史や海底遺跡出土品の研究成果を、担当の山下学芸員より解説して頂きました。

参加者は復元されたオランダ商館の美しさや、初めて目にする、海底遺跡より引き上げられた遺物等に感嘆の声をあげ、今回も充実した研修を行うことが出来ました。



平戸オランダ商館にて解説を受ける受講生

## おめでとうございます！ 第 9 回あおによし賞受賞

このほど、赤絵町の辻昇楽（本名：人之）さんが読売新聞社主催の第 9 回読売あおによし賞の奨励賞を受賞されました。この賞はかけがえのない文化遺産を最前線で守り伝え、卓越した業績をあげた人たちを顕彰するというものです。

辻家は江戸時代から続く赤絵屋の子孫で、昭和 10 年以降は上絵具等の製造専門業者となりました。和絵具の融和剤として欠かせない辻唐石の他、辻家が製造する各種上絵具は、伝統的な制作技術で製造を行う有田焼の窯元を支える重要な原料であるということで、平成 20 年 4 月 23 日付けで、有田町の選定保存技術に選定されています。

この度の受賞で今後、益々のご活躍を祈念しております。

## トピック展「陶器市今昔」を 行いました

資料館エントランスにて、トピック展示「陶器市今昔」を展示しました。これは昨年行った企画展「なつかしの有田～Part2」が好評で、少しでもよいので展示してほしいという町民の方の要望と、資料館ボランティア組織「ありたれきみん応援団」の団員から、常設展示に加えて期間限定でちょっとした展示を考えてほしい、という要望を受け、4 月末から 5 月末の間、30 枚ほどの古写真を展示しました。

陶器市で有田に来られた方々にも大変好評で、今後も、このように期間限定の「小さな展示」を行っていききたいと思います。



## 福岡県小郡市より、 有田へ研修旅行に！！

平成 27 年 4 月 24 日（金）に生涯学習施設であるのぞみが丘生楽館一行 20 名、平成 27 年 5 月 15 日（金）小郡市郷土史会一行 25 名が当館へ研修に来館。れきみん応援団員の説明を受け、館内のほかに九州陶磁文化館や天狗谷窯跡、有田内山伝統的建造物群保存地区なども見学し、有田のことをしっかり学んでいかれました。

私達も他の博物館などへ研修に行き、多くのことを学んできますが、逆に当館・有田の地へ外部から研修に来ていただくこともあり、そういう時は大変嬉しく思うと同時に、受け入れ側として、さらに学んでいかなければという思い、これからの交流も期待したいという思いが溢れてきます。

## 季刊『皿山』

通巻 106 号（平成 27 年 6 月 1 日）  
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒 844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山 1 丁目 4-1  
☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185  
URL : <http://rekishi.town.arita.saga.jp>